

今回の「臨床美術士を訪ねて」は、特別編としてコロナ禍での活動の様子をご紹介します。現場はもとより、外出も制限される状況の中、臨床美術士同士のつながりを感じてもらいたい、また今後も続くであろう“ウィズコロナ”の生活における臨床美術を考えるきっかけになればと、全国の臨床美術士の活動や思いをFacebook「臨床美術ひろば」でご紹介してきました。今回は、その中からお二人の活動をご紹介します。

※本記事は、Facebookに掲載した内容をご本人の許可を得て再編集したものです。

「現場で働く方々や臨床美術士を元気に」

自粛が始まってから鳥取県で取り組んだこと

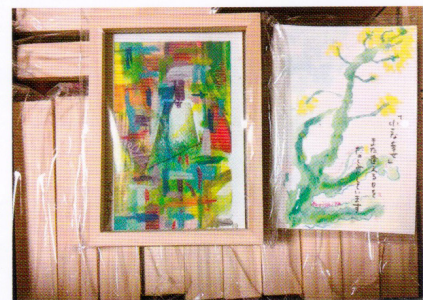


臨床美術士2級

「クリニカルアート鳥ト雲(とりとくも)」代表

井澤ゆうかさん

(鳥取県)



一人暮らしの参加者さんたちへ発送した作品

春からの新型コロナウイルスの流行にともない、鳥取県内の臨床美術講座の現場も自粛しました。その中で「現場(定期講座先)で働く方々や臨床美術士自身を元気に」を念頭に行ったことをご紹介します。

「クリニカルアート鳥ト雲」は、鳥取県と島根県の23名の臨床美術士で構成されています。県をまたぐ移動が制限されたこと、また、県内の現場が休止していること、「まずは臨床美術士自身を元気にしたい」そんな思いから自宅で楽しめるアートプログラムと画材を全会員に送りました。また、オンラインツールのZoomによる新しいアートプログラムの体験会や交流会など、会員同士とつながる場を設けました。

3月からは、感染予防のため全ての講座を休止しました。休止中の電話でのやりとりの中で、高齢者施設の現場から「自分たち職員に何かできることはないか」という要望をいただきました。そこで、職員の方がご利用者様に実施できるアートプログラムを発送しました。その後、実施した報告や、それを受けた細かなアドバイスをLINEで伝え合い、ご利用者様の自己表現の場を継続して設けることができました。また、仲間の臨床美術士とともに社会福祉協議会と連携し、フレームに入れた作品と手紙を、一人暮らしをされているご高齢の方のご自宅へ届けました。より一層自宅に籠もる生活を強いられる中で「状況が落ち着いたらまたみんなに会えますね」という希望をお届けしたいという気持ちからでした。4月後半からは各現場が落ち着いてきました。そのタイミングでZoomを通したオンラインでのアート講座も再開し、2ヶ所の高齢者施設※では現在もオンラインで講座を行なっています。(※臨床美術士の資格を持っている現場の職員と連携しています。)10月現在は、感染予防を徹底し、人数制限を設けながら、8割の現場が再開しています。

「どんな状況下でも言葉やアートで気持ちを表現できる場があって良かった」「人とのつながりがより強くなった」「こんな時だからこそ自分に目を向け大事にする習慣ができた」この数ヶ月間で心温まる感想をたくさんいただきました。

これから世界中が新しい生活様式に変わっていきます。これまでのコロナ禍を振り返ると、LINEやZoomなどのオンラインツールが現場をつなぐ大切な役割を担ってくれていました。意識の向け方で、とても効果的に活用できるのだと実感できました。今後もIT環境の特性を良く知り、臨床美術の現場に効果的に生かしていきたいと思います。



会員たちと実施したオンラインプログラム体験会
(Zoomのスクリーンショット)